

ヘル
マプ
ロ
ヂ
イト
ス

I

Hermaphroditus

SEIDOU

正道

両性具有の景色↓



目次

| | |
|--------------------------|----|
| ヘルマプロディトス I | |
| 全体の目次 | 3 |
| 序説Ⅰ ヘルマプロディトスとは何か | |
| 男でもあり女でもある存在 | 5 |
| 序説Ⅱ ヘルマプロディトスの神話 | |
| 緒言 | 10 |
| プロローグ | 10 |
| 少年神とニンフの物語 | 11 |
| エピローグ | 15 |
| 第1章 妊婦と胎児（座標1） | |
| （1）女性側「妊婦」 | 17 |
| （2）男性側「胎児」 | 18 |
| （3）胎児が女兒である場合 | 23 |
| 第2章 カインとアベル | |
| （1）非美なるヴィーナス | 27 |
| （2）農耕を許さなかった神 | 32 |
| （3）土地取得による農耕民族化 | 34 |
| 第3章 ビジネスマンとキャリアウーマン（座標5） | |
| （1）非情にしてドライな良識人 | 37 |

(2) 男性化した女性 40

(3) キャリアウーマンの肯定面 42

第4章 リリト

(1) フェミニズムの象徴 46

(2) リリトの神話 47

(3) アダムとリリトの結婚と離婚 49

付録

オウダイウス『変身物語』より 55

参政党の躍進に関して 57

ヘルマプロデイトス
I

全体の目次

序説1 ヘルマプロディトスとは何か
序説2 ヘルマプロディトスの神話

- 第1章 妊婦と胎児（座標1）
- 第2章 カインとアベル
- 第3章 ビジネスマンとキャリアウーマン（座標5）
- 第4章 リリト
- 第5章 聖母と神秘主義者（座標9）
- 第6章 アナトとバール
- 第7章 ディオニュソスとアリアドネ（座標0）
- 第8章 シヴァ
- 第9章 アダムと肋骨（座標10）
- 第10章 エメラルド板

ヘルメティック・トリニティを結ぶにあたって

序説 I

ヘルマプロデイトスとは何か

男でもあり女でもある存在

最初の挿絵 png



両性具有の存在

ヘルマプロディトスとは何か？ 右図のように、男女が一体となった存在の名称である。

本書では、このヘルマプロディトスについて論じていきたいと思っている。とくにこの存在が表している「両性具有性」について。

両性具有、つまり両性を具えて有しているとは、要するに「男でも女でもある」ということだ。

しかしながら、現代心理学においては、

「男性に心のうちには、幾分かの女性的要素が含まれている」

「女性の心のうちには、幾分かの男性的要素が含まれている」

ということは、もはや常識であると言ってよい。逆にいえば、純粋に男性的要素だけで構成されている男性もいなければ、純粋に女性的要素だけで構成されている女性もまた、この世に存在しないということだ。

そうであるならば、話の結論として、いかなる男女も既存として、あるいは常態として、いくらかは「ヘルマプロディトスの状態」にあることになる。

とすれば、これから私が述べようとしていることは、いまさら論じても何ら意味がないことなのだろうか。しよせん、言わずもがな、のことでは済まないのだろうか。

男女要素の占有率

そんなことは絶対でない、と、ここで早々に断言しておこう。

たしかに男女の両性は、一人の人間のなかで、これまでもずっと共存してきた。それ自体は間違いない。とはいうものの、その男女要素の「占有率」に関しては、心の各段階（各座標）によって、大きくその比率を変えているのである。

それはすなわち、ヘルメスの杖の各段階において「この座標においては男性要素が優位になる」「しかしながら、この座標では女性要素が優位になる」といったことが在り得るということだ。

その具体的な様相については、本文に叙述の場を譲ろう。いま言っておくべきは、この比率の差異について語ることは『神の似姿の人間』を採求するうえで、大きな収穫をもたらすだろう、ということである。というのも、錬金術におけるヘルマプロディトスは、明らかに一種の神であるからだ。その点は疑いようもない。

すでにギリシア神話においても「神たること」に疑問の余地なきヘルマプロディトスではある。だが錬金術においては、その神性が、ギリシア神話のときの何倍も尊ばれているのである。

アンドロギュノスは用いず

もつとも、その錬金術を研究したユングは、未分化な（＝混在的な）男女合一をヘルマプロデイトスと呼び、他方、心理的に整理された（＝総合された）男女合一をアンドロギュノスと呼んだ。ユングは、これら二つを峻別したのである。

けれども私は、本書において、そのような呼称の使い分けはしなかった。というのも、本書では、五種類ものヘルマプロデイトスを、紹介することになるからだ。

したがって、なにもヘルマプロデイトスとアンドロギュノスという二分法を採らなくとも——それぞれこのヘルマプロデイトスが属する「座標」を明示するだけで——各ヘルマプロデイトスの精神的高低もまた、十分に明確になるだろうと思うのである。

それでも敢えてユングに倣うならば、本書における座標9と座標10のヘルマプロデイトスが、彼のアンドロギュノスに相当する。一応そのように言えるだろう。

序説 2 ヘルマプロデイトスの神話

緒言

本文に入っていくまえに、ここで「ギリシア神話におけるヘルマプロディトス」について物語っておこうと思う。これは、一般的にはあまり知られていない神である、ヘルマプロディトスの紹介も兼ねている。

少しだけ背景に触れておくと、このヘルマプロディトスについて書かれた物語は、古典神話に限ってみれば、オウディウスの『変身物語』だけだそうである。つまり、かのホメロスもヘシオドスも、この神には、いっさい触れていないことになる。

そこで、ここに『変身物語』からの抄出文を掲げようと思ったのだが、そのためのパソコン入力が済んですぐに、それもあまり芸がないような気がしてきた。

そこで本章においては、原文そのものではなしに、『変身物語』をベースにアレンジした「私の作品」をお見せしたいと思う。

なお原文については、本書の巻末に「付録」として収めることにした。

この「付録」は、べつに何としても読まなければならないものではない。だが、これに接することにより、私がオウディウスの文章をどのように変化させたか。どこを変え、どこを変えなかったかが、読者にもよく分かるようになるだろう。それは少なからず、皆さんの興味を引くことではあるまいか。いずれにせよ、まずは正道版の「ヘルマプロディトスの神話」をご覧くださいと思う。

プロローグ

ヘルマプロディトスの心の中における対話

ヘルマプロディトス サルマキス、返事が出来るだろうか。

サルマキス ……今さらあなたは、私のことを「サルマキス」と呼ぶのですか。私があなたになり、あなたが私になってから、気が遠くなるほど長い時間が過ぎているというのに。私たちは、もうずっと前から一柱の神として成っているというのに。

ヘルマプロディトス これは自己内対話と言えはいいのだろうか。私も不思議な感覚を覚えるのだが、父

から「私たちが、まだ二人の存在だったころの思い出を語ってほしい」という要請があったのだ。

サルマキス あのお父さんからですか。

ヘルマプロディトス そうだ。ならば、私が一人称で語るよりは、いっそ心だけでも「二人のとき」に戻ろうと思った。そうして、ここに対話篇のようなものを編めないかと思ったのだ。

サルマキス 分かりました。誰であれ、あなたの父親である「至高の神」の命に背くことは出来ません。私も出来るだけ忠実に、当時の自分自身を再現してみせましょう。

ヘルマプロディトス ありがとう。では始めてみようか。

少年神とニンフの物語

ヘルマプロディトス 僕の名前はヘルマプロディトス。十五歳の男の子だ。

親はヘルメスとアフロディーテ。ヘルマプロディトスという名前から、それに気づいた人もあるかもしれない。でも母さんには、ヘパイストスという旦那さんがいる。だからヘルメスとアフロディーテの仲は、僕は不倫なんじゃないかと思うんだ。君だってそう思うだろう。

ところが母さんは言うんだ。僕のお父さんは、あのヘルメスじゃないって。母さんによれば、僕のお父さんは、ヘルメス・トリスメギスっていう、神々の世界を超越した異界に住んでいるヘルメスなんだって。だからここには、不倫なんて言葉では抱えきれない、ものすごく高いところにある「神の摂理」が働いているらしい。

だから母さんは、僕に「自分の血筋に誇りを持ちなさい」って言ってきた。

でも僕はまだ十五歳だもの。そんな難しいことは分からないよ。

僕にとっては、そんなことより、いま目の前に広がっている景色のほうが、よっぽど大事なんだ。この高台からは二つの町が遠望できる。とても賑やかそうなりキュアの町と、その隣のカーアだ。カーアはリキュアほど賑わっていないけど、そのぶん緑がキレイに見える。

いや、僕にとっては、どんな景色だって無上に美しく見えるんだ。だって僕、つい最近までずっと、薄暗い洞窟で暮らしていたのだから。

そりゃ、僕を育ててくれた水の精は美しかったさ。洞窟から見えるイダの山だって雄大だった。でも僕はそれらに、悲しいぐらい「見慣れて」しまっていたんだ。なにしろ十五年も見続けてきたんだから。

こんなの完全に軟禁じゃないか。

でも今年になって、ようやく母さんが、僕に旅に出る許しを与えてくれた。それで僕は今ここにいるんだ。

そうして……ああ、まったく素晴らしい。未知の風景は、それがどんなものであっても、この心を沸き立たせてくれる。本当にそうだ。こんなにも広々と胸が膨らむ思い、僕はこれまで一度だって味わったことがない。

それにしても、いま歩き始めてすぐに見えてきた、あの池の美しさはいかばかりだろう。あそこには、葦も水草も生えていない。池の周りは、みずみずしい芝と、常緑の若草ばかりだ。そして湛えられた池の水の、これまた何と青く透明なことだろう。

ただ、池のほとりに、誰か女の人がいるように見えるなあ。

サルマキス 私はサルマキス。この泉に住んでいる妖精です。己惚れではなしに、人からはよく美しい女性であると言われています。それもそうで、私は自分の容姿に、人一倍の気を遣っているのです。よって、その気遣いに見合うだけの成果を出しているだけなのです。

たとえば私は、いつも自分の泉に体を浸しては、自分の肌がしっとり潤うのを見守っています。また、櫛で髪をとかしては、どんな髪型がいちばん自分に似合うのかを、いつでも泉に映った自分に問いかけているのです。

そして今は、泉の岸辺で、自分の髪を飾るための花を摘んでいるところです。

けれども私は、どんな花よりも美しいものを、いま自分の視界のなかに認めてしまいました。

あれは誰でしょうか。確実にこちらへ近づいてきますが、そうして彼が近づくほどに美しい印象が増していきます。どうやら少年のようですが、まるで女神のように美しく見えるのです。

ああ、もう彼は目の前ではありませんか。私には、彼に語りかけずにいるなんてことは出来そうもありません。

「ねえ、お若いお方、まるで神さまのように見受けられますわ。もし神さまでしたら、さしずめエロスさまではないでしょうか。それぐらいにあなたは美しいですわ」

ヘルマプロディトス みんな聞いてくれよ。僕は、いきなり僕を不機嫌にする女に出会った。なんとこの女は、僕を「エロスではないか」と言ったんだ。

エロス……この異父兄弟を、僕はずっと憎ったらしい奴と思っている。だって、母さんの息子と言ったら、誰だって「それはエロスだろう」って言うんだから。

僕はそれを聞かされた時に、自分が日陰の存在なんだと思ひ知らされる。アフロディーテの息子のことを聞かれて、誰も「それはヘルマプロディトスだろう」とは言わないのだから。ああそうさ、日陰の存在だからこそ、僕はずっと、洞窟の中なんか押し込まれていたんだ。あの薄暗い洞窟に！

こんな美しい景色のなかにあつて、こんな嫌なことを思い出させたんだ。だから僕にとって、この女は「絶対にない」。

サルマキス どういうことでしょう。美の女神の息子にさえなぞらえたというのに、この男の子は、たいそう不満そうな顔をしています。あれは最上の誉め言葉であったのに。

困りました。これはもう、私の「女の魅力」を發揮しきらなければ、どこまでも彼が遠のいてしまいそうな気配です。もう恥も外聞ありません。彼をつなぎとめるために、私はいま精一杯のことを致しましょう。出来るかぎりの媚びを売って彼に話しかけましょう。

ヘルマプロデイトス 女がしなを作って言った。

「誰か好きな人がいるのですか？ いえ、いいんです。私は出しゃばりませんので、浮気の相手でもないのですよ。でも、もしも誰とも付き合っていないのならば、私をそのようなものとして考えてくださいませんか」

って、何を言ってるんだ、この女は本当に！ 僕がお前なんかと付き合ってたまるか！ 言っていることはいかにも恥知らずだし、なにより僕は、お前が僕のことを「エロス」と評したことを忘れてない。廉恥と怒りとで、顔が熱くなつていくのが自分でも分かるぐらいだ！

サルマキス 少年の顔がすっかり赤くなりました。やだ本当におぼこなね。純情なのね。その恥じらうような姿といたら、ああ、もう、なんて愛らしいのかしら。まったくたまらなくなる。私、どうしても自分の思いを口にせずにはいられないわ。

「ねえあなた、私と結婚いたしましょうよ。いまここで抱きあいましょうよ。こちらにいらして、私の手をとって。お願いだから来てちょうだい」

ああ、けれども少年はこちらに来てくれない。きっと臆病になっているのね。まだ女というものを全然知らないのかしら。年頃からすれば当然なのかもしれないけれど。

でも私のほうの気持ちは抑えきれそうにない。せめて姉弟のようなキスだけでもしたいわ。ああ、もうだから私のほうから行くの。どうか、その項に手を触れさせてちょうだい！

ヘルマプロデイトス 急に女が迫ってきた。これはハッキリと言わなければ危険だ。

「やめてったら！」

おっ、やった、驚いた顔をしているぞ。やっとこの女も分かったんだ。僕が本気で嫌がっていることを。もうひと押しすれば、きつと離れてくれるに違いない。

「やめないなら、僕はこの池から離れるよ。そうして君にも、この場所にも永遠にさよならだ！」

サルマキス そんな！　こんなにも美しい私を拒絶するなんて。ああ、子供っていうのは、なんて扱いが難しいものなのでしょう。でも彼を失いたくはない。ここは我慢して、一度身を引くのがよいのでしょうか。

「この場所は、あなたに明け渡すわ。私のほうが離れます。遠くに引っ込んでいるから、ここはどうぞ、あなたのお好きなように。ええ、そうしますわお坊ちゃん」

でも違うの、これは言葉だけのこと。私は、そんなに遠くまで離れる気はない。少しだけ離れた木陰に身を隠して、そこで少年の様子を伺うことにしましょう。

ヘルマプロデイトス　ようやく離れたあの女、姿が見えなくなってから、もう半刻ぐらいは過ぎただろうか。

たぶんもう大丈夫だろう。この辺りには誰もいない。僕が長旅の疲れを、あの透明な池の水ですすいだとしても、それを邪魔する奴は誰もいなくなったんだ。

こうして爪先を水に入れると、ああ、なんとも気持ちがいい。冷たすぎない、優しい温度の清水だ。水底に踵をつけても、足を滑らせるようなぬめり気は感じない。全体に素晴らしい水質の池だ。

もう服も脱いでしまおう。こんな極上の水質ならば、頭から足先まで、すべて洗ってしまうのが良策だ。

サルマキス　ああ、ああ、なんて美しい裸身なのでしょう！　こんなに美しい体は、これまで一度も見ることがない。ああ、駄目だわ、もう欲望の炎が燃え立つのを抑えられない。一瞬でも目を閉じることが出来ない。

じっとしてなんかいられない。喜びを先延ばしにすることなんて出来ない。

それに彼は「私の」泉に入っているのですもの。私が水の流れを自由に操れる、私の泉に！　そう

よ、私の勝ちよ！　とうとう彼を手に入れたんだわ！

いっそ私も服を脱いでしまおう。そうしてから、あの泉のなかに飛び込んでしまおう！

ヘルマプロデイトス　急にあの女が走ってきた！　目が爛々と輝いている！　奴め、どこかに隠れていたんだ。なんていう狡い女なんだ。

水に入ってきた。逃げよう！　……だが何てことだ、泉の水が、糊のようになって僕の体に張りついてくる。これじゃ全然動けない！

ああ、唇を奪われた。胸をそんな手つきで触るんじゃない。そう思うのに言葉が出ないのは、唇にも糊のような水が付いているからなのか。

この女はまるで蛇だ。仕留める獲物に絡みつくように、僕の体のそこかしこに手足を伸ばしてくる。僕に出来るのは、せめて自分の体を、閉じた貝のように固くすることだけだ。

サルマキス おお、こうして彼に体を押しつけると、何とも言えない快楽を感じる。こうなれば、私の体の隅々を、彼の体に擦り合わせてしましましょう。もう何もかもをくっつけてしまうのです。ああ、勝手に顔がにやついてしまいます。彼は怒っているけれど、それすらも今は嬉しくなってしまう。「どう、あがるものならあがいてもいいのよ、まだ幼いいたずら小僧さん、うふ、どうしたって逃げられませんかね」

もう彼は私のもの。ほかの誰にも渡したりはしない。未来永劫ほかの誰にも！

「神さま、どうかお願いします。いついつまでも、この人を私から、私をこの人から引き離さないでください！ 私はまだ彼から離れたくありません！」

エピソード

信じがたいことだが、このサルマキスの願いを、ヘルメス・トリスメギスが聞き入れた。そのため、この時を境に、二人の体は混ざりあって合一し、完全に一つの体躯となってしまった。

今や彼らは二人とは言えない。複合体と言うべきものであり、男でも女でもなく、男女（おめ）と呼ぶべきものとなっていた。

そのときヘルマプロディトスは、天に手を差し伸べながら、もう男らしさを半ば失っている声で言った。そこに入った時には男であった自分を「男女」に変えてしまった池の中にあつてである。

「お父さん、お母さん、お二人の名前を継いでいる息子の願いを、どうかお聞きくださいますよう。もう私は駄目です、この女と、完全に一つになってしまいましたから。」

けれども私は、今回のことにあたって、一つの腹いせを考えついたのです。

というのは、この呪われた池と同じようなものを、天地のいくつかの場所に、まるで落とし穴のように潜ませるといふ趣向です。そして願わくは、誰でもこの泉に入ったならば、すぐさま私と同じような男女になってしまうように！」

ヘルメス・トリスメギストスは、息子のこの願いを叶えてやった。至高の神たる彼は、ひそかに五つの池（＝本書の奇数章）が出現することを許し、そこに、入った者が男女（おめ）となる魔力を付与したのだった。

第1章 妊婦と胎児（座標1）

（1）女性側「妊婦」

目に見える雌雄同体

神話上のヘルマプロディトスは何だか気の毒だったが、私たちは気を取り直して、ここから本題に入ることにしよう。

では座標1から始めたい。この座標で雌雄同体のヘルマプロディトスについて語るとすれば、やはりまずは「妊婦」に触れなければならないだろう。

妊婦とはむろん胎児を孕んだ女性のことである。そして、その胎児が男の子であった場合、妊婦はまさに、文字通りの雌雄同体ということになる。

つまり現に、物理的に「一つの体を共有している男女」がそこにいるということだ。これはまさしく、ヘルマプロディトスの定義そのものではないか。

もっともこの場合は、共有された身体のひとつを、女性の側が占有していると言わなければならない。妊婦の最初期状態など、とくにそうである。

なにせ受精卵などは、たった一つの細胞に過ぎない。

もっとも、この細胞の性別などは、まだ天のみぞ知る状態であるが、ここでは仮に男であるとしよう。となれば、男の側は細胞一つであるということだ。それに比して、受精卵を包摂する母体のほうは、なんと三七兆もの細胞によって構成されている。これは圧倒的なまでに偏った比率であると言えるだろう。

保護という愛のかたち

このような女性側の圧倒的な優位性を前提にして、そこに彼女の「胎児に対する愛情」が芽生えたでしょう。するとその愛は、必然的に「保護」の色合いを帯びることになる。

さしあたって愛とは、相手にたいして「良かれ」と思いやる気持ちのことである。それゆえ妊婦の愛は「小さき我が子よ健やかなれ」という願い、すなわち「保護」になるのである。

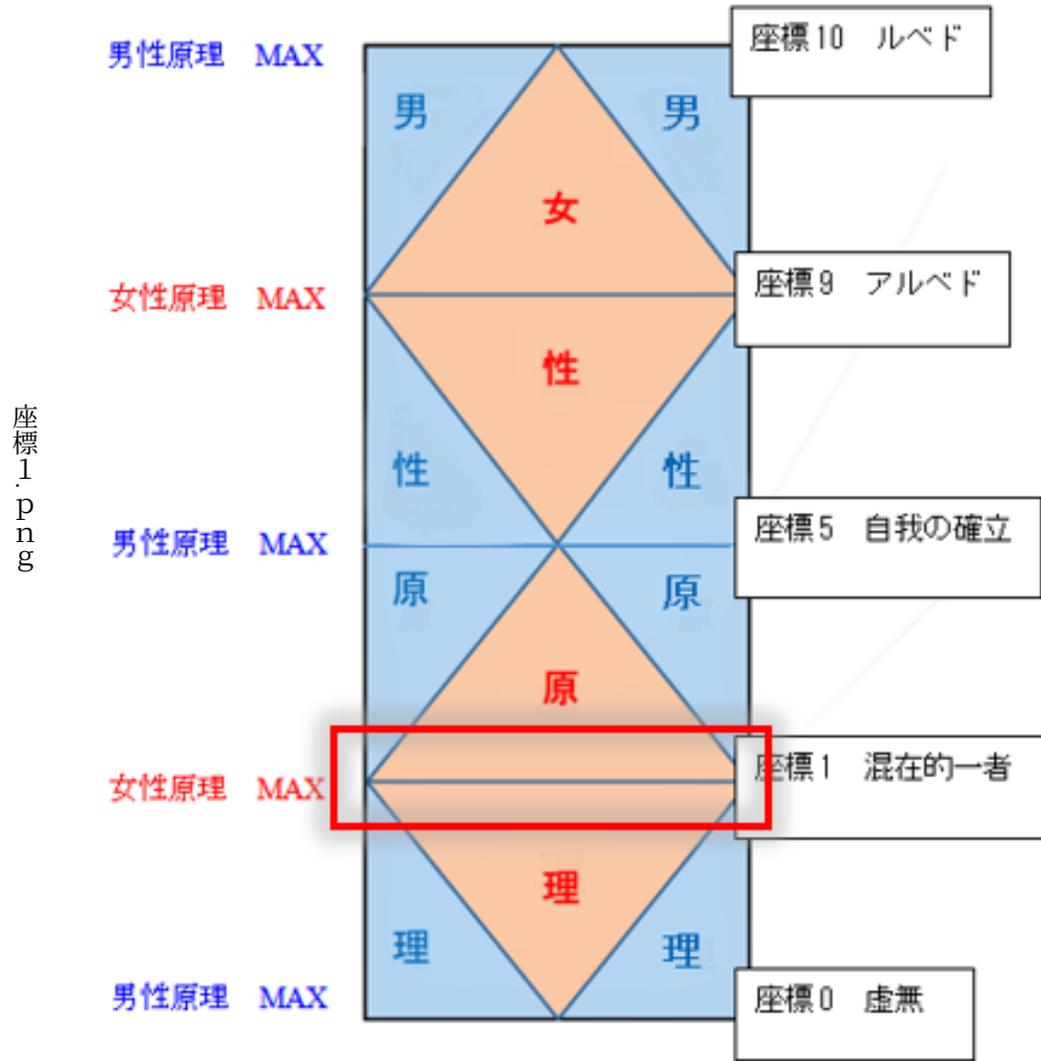
事実妊婦は、胎児が順調に大きくなっていくことを願わずにはいられない。そして、その願いが実現していく過程として、十月十日の妊娠期間がある。そうして、その期間の終わりには、あの苦痛と喜びに満ちた出産の場面があるのである。

それは女性にとって、本当に特別な期間であり、本当に苦勞の多い期間である。しかし彼女の「胎児に対する保護としての愛」が、このイベント期間を乗り越えさせる力となるのだ。

そして、その愛は、出産後もなお引き継がれることになる。つまり母性本能のあらかたが尽きるまで、母は子供の健やかなる成長を「保護」の立場から見守るのである。

（2）男性側「胎児」

原理図



面積ゼロの男性原理

まず右の原理図を見てほしい。座標1の高さに横線があるが、この線は、完全にピンク色の女性原理に属している。水色の男性原理に触れているのは、両端にある二つの点のみである。つまり直線の端の部分のことだ。

点はゼロ次元を表し、それが二つあっても「0+0」で0にしかならない。このゼロに相当する量が「母体・受精卵」の時点における、男性原理の占有率である。

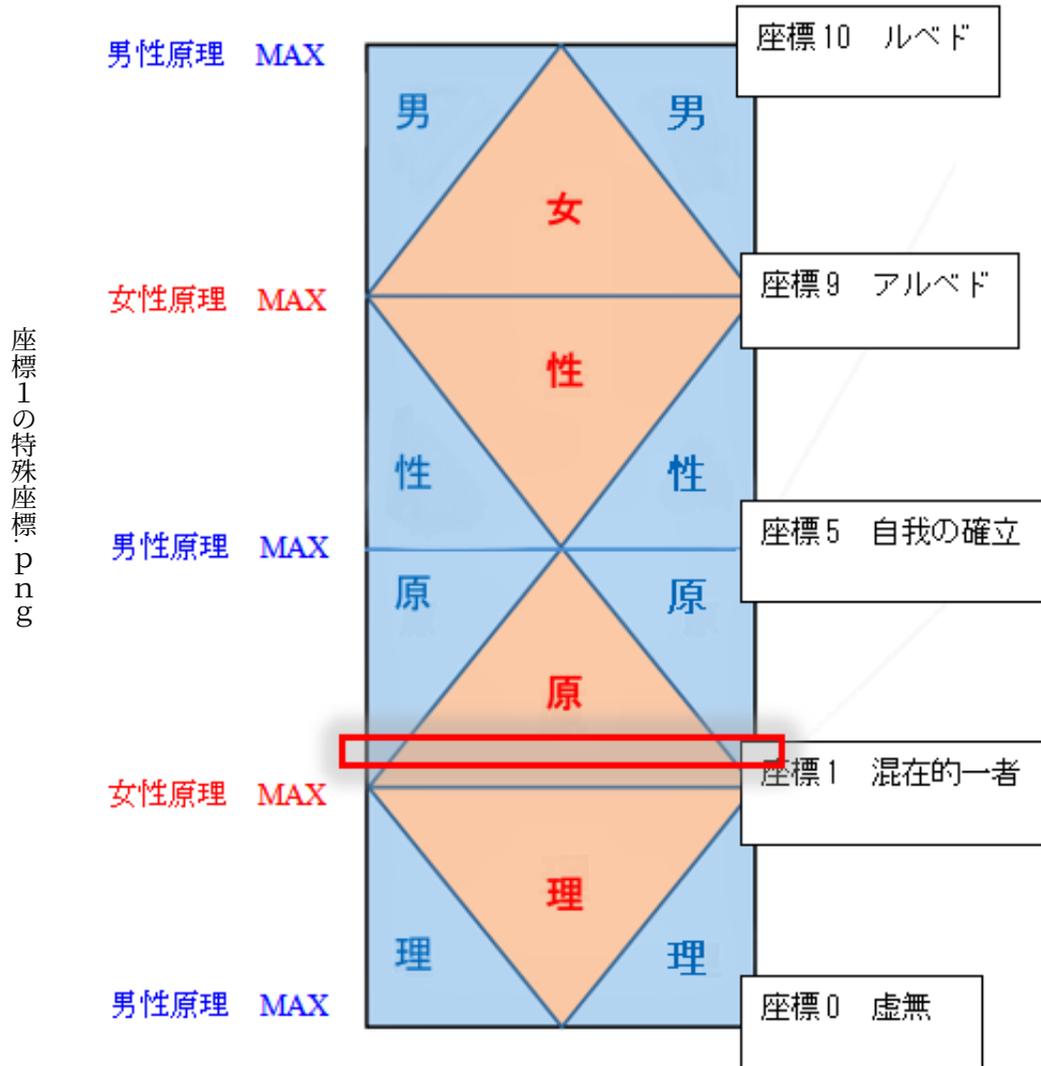
ゼロではさすがにおかしいだろう、と言うのであれば、べつに「1」でも構わない。だが、それは限りなくゼロに近い1である。というより、考慮するのも馬鹿らしい数値なのだ。なにしろ相手は三七兆なのだから。

なにせよ、座標1においては、男性原理は、女性原理（母体）に圧倒されている状態にあるのである。

出産から教育の初期

くだんの横線をわずかに上昇させ、

原理図



右図のように太線の四角内が、少しだけ水色の面積を獲得したあたりで「出産」が行われる。そこで母体と子供の分離が行われるわけで、この「分離」は、分けることを本質とする男性原理の働きに他ならない。

私は第二福音書においては、母体から子供が分離したあとの一年間についても、混在的（座標1）の範疇に含めた。その期間、母親のメンタリティは「心理的妊婦」の状態にあるからである。

しかし、かかる期間には、肉体的にも妊婦だった時ほどの「子供と一体であること」の純粋性はない。ここに僅かながらも男性原理が働いている以上は、である。

そして、太線の枠をさらに上昇させていけば、座標2の「教育の初期」に至る。このときには、叙述の舞台に、父親までが登場することになるだろう。教育の初期は家庭内教育の時期であり、その主導者となるのが父親であるからだ。

しかし本書では、そこまでの変化を追うつもりはない。ここでは、あくまでも「女性原理に圧倒され、女性原理に服属している」程度の男性原理を描くことにしよう。

女が男になっていく

そうしてみると、その「男児が女性原理に圧倒され、女性原理に服属している」ことの最も明証的な事例が「人間は誰もが女性として生まれてくる」というファクトになるだろう。

この私の言葉に耳を疑う人もあるかもしれない。なにせ出産のときには、すでに人類の半分は男児として生まれてくるからだ。

しかしながら、ここで言っているのは、まだ妊娠の初期段階、エコー画面で見ても、胎児の性別が判らない頃の話なのである。

この時期にあつては、胎児の体は、もれなく女性のそれである。そして、女兒はそのまま女性の姿を保持していくが、男児の場合は、これ以降、女性から男性へと「変化していく」のである。

これについて免疫学者の多田富雄氏は次のように言う。

「遺伝的に男と女が決まっているといえますけど、そんなことはないんです。それじゃあどうして決まるかといいますと、どうも、もともと人間は女であつて、なんとかして男という役割分担を作るという目的だけでY染色体というのが働くんです」

「ほっとけばみんな女性になっちゃうんですけど、Y染色体のほうから、女性ホルモンを男性ホルモンに変えるような指令が出るんです。そうしますと、男性ができるんですね——河合隼雄対話集『こころの声を聴く』より

男性の乳首

そうであることの最も身近な証拠が、成人男性の乳首だ。

成人男性の一人である私にも、当然のこと乳首がある。とはいえ、この乳首が何かの役に立ったことはない。乳が出たことはないし、女性のように乳房が膨らんで、体形の美しさに奉仕したこともない。そうであるため、いちど気になり始めたなら「なんでこんな無駄なものがあるのか」と思わずにはいられない。おそらく男性の誰もが、これと同じような事情を抱えていることだろう。むろん気にしなければ、一生気にならない些事ではあるけれども。

このように役立たずの乳首がなぜあるか。実はそれは、男性が母親の子宮内にいた頃、とりわけ妊娠初期、すなわち「自分が女性だった頃」の名残りなのである。

その時点で、すでに男性というものが「女性と異なったもの」であったならば、こんな役立たずの乳首は、はなから装備されなかつただろう。だがそうでなかったということは、やはり妊娠初期においては、人類のすべては女性であり、男性はやがてそこから派生する「二次的な存在」でしかなかったということなのである。

これを逆にして言えば「人間の原初的、根本的デザインは女性体である」ということにもなるだろう。

男児が虚弱である理由

かくして、妊婦時代の「女性原理の優位」は、右のような事例からも充分に推察されるのである。

さらには、出産によって、男児が母体から分離されて以降も、私には次のような言い方が出来るのではないかと思っている。すなわち、

「男というのは、女が無理をして男をやっている姿なのである」と。

つまり、本来ならば女性で通すのが自然であるところの「女性」が、無理な変化をしてまで「男性」をやっているのが、この世界の「男の在りよう」なのである。

そのように考えれば、男性の幼児期がわりと虚弱であるのも、また男性の平均寿命が、女性のそれと比べてずっと短いのも納得がいく。そこに先天的な「無理」があるからこそ、男性の肉体は、女性ほどの「自然体の強さ」を持ってないのである。

さきに発言を引用した多田氏（男性）もまた同じように言う。

「私たちはそういう存在なんです。無理矢理男性にさせられていますから、いろんな病気、男にだけ起こる病気、たとえば色盲とか血友病とかたくさんありますからね（前掲書より）」

（3）胎児が女兒である場合

女性・女性のパターン

これまでは、妊婦と胎児が「女性・男性」であるパターンだけを見てきた。ヘルマプロデイトス（両性具有）が本書の主題なのだから、まあ当然と言えば当然である。

しかしここでは、胎児が女兒である場合、つまり「女性・女性」のパターンについても、少しだけ触れておこう。

そうしてみると、このパターンで母親のなかで生じるのが「不死の感情」である。第二福音書でも触れたが、この「不死の感情」は、女性が「妊娠・出産・育児」を行うなかで、次第に先鋭化されていくものと思われる。

すなわち、子供を産み育てるといって、女性人類にとっての普遍的営為の中で、彼女のなかに次のような省察が芽生えるのである、

「かつてそれをしていた母、今それをしている自分、やがてそれをするであろう娘がいるのだ」という。

この「かつてそこにあり、今ここにあり、未来にもそこにある情景」が、女性の心のうちに、一種の無時間性をつくり出す。

そして、これが女性としての「不死の感情」につながっていく。つまり彼女のなかに、死への不安からおおかた守られた、心の盤石な安定感を形づくるのである。

頼もしい母親

われわれ男性は、自分が「死によって現世から潰えてしまう存在」であることを知っている。というより、私たちには、そのテーゼを克服するような、いかなる肉体的要因も与えられていない。

だから私たち男は、死への不安を払拭すべく「死後も生き残る功績」を求めてやまない。そういう形でしか、死への不安と折り合いをつけることが出来ないからだ。

それに対して女性は、そもそも「死によって自分が無くなること」を、あまり意識せずにいられる。もちろん、かの「不死の感情」が影響を与えることによってである。

このため彼女たちは、何かを求めあぐねることもなく、いつも泰然としていることができる。コチョコチョと「とにかく何かせねば」と躍起になることもない。これが男性の目には、何とも頼もしく見える。

また彼女らの「母性愛」は、どんな時であっても、その優しさを保持することが出来る。いつまでも自分が存在しつづけるならば、その優しさもまた、恒常的なものであって良いからである。

これに対して——不死の感情を持たないために——死を意識せずにはいられない男性（父親）は「自分がいなくなった後の、わが子の自立生活」を考慮せずにはいられない。

だから彼は、わが子の自立を促すための「厳しさ」を、自身の愛に織り交ぜずにはいられないのだ。こうした厳しい愛が、一般に「父性愛」と呼ばれている。

いつかこうした感情に行きつく私たち男は、幼少期から、勝ち負けに特化した遊びばかりする。勝負事には、つねに成長と厳しさが伴うからだ。結果、男の子たちの遊びは、たいてい格闘技の真似だったり、球技であったりするのである。

それを横目にして、女の子たちは、人形あそびやママゴトなどに精を出している。これは結局のどこ

ろ、母親になるための準備であると言えるだろう。

とすれば、それはまた「不死の感情」の学習風景であるとも言い得る。母親になろうとすることは、彼女の生命を、過去と未来に向かって伸長することだからである。

第2章 カインとアベル

(1) 非美なるヴィーナス

ミロのヴィーナス

『ネチェリケト』で「ミロのヴィーナス」に言及した。座標5の補論においてである。そこに書かれていることを要約すると、おそらく次のようなことになるだろう。

——引き締まった腹筋は、男性美のみならず、女性の肉体美についても、その重要な構成要素となるものである。そのことを証明するのが、女性美の典型であるはずの、ヴィーナス（美の女神）のプロポーズである。

というのも、最も有名なヴィーナスである「ミロのヴィーナス」の腹部は、そこに男性の腹筋を挿入したものだと言われているからだ。

かくして、男性のように引き締まったウエストは、ヴィーナスという「女性美の典型」を構成するための重要パーツとなったのである——

二つの女性像

ところがである。同じくヴィーナスと呼ばれているのに、上記の「引き締まった腹部」という要件を全く満たさない——というよりは全く満たす気がない——女性像が複数存在するのだ。それは、とても古い時代のもので、古代の遺物と言ってもいいだろう。

ここでは、そんな古代ヴィーナス像を二つ、図版つきで紹介したいと思う。

さきに紹介するのは「レスピュグのヴィーナス」である。フランスはピレネー山脈の麓にある洞窟で発見された。この地名がレスピュグなのであり、その発見は、一九二二年のことだったという。

このヴィーナス像は、今から二万五千年ほどまえに作られたとされており、サイズは十五センチメートルほど。いたって小さな像である。象牙製であるが、その牙の持ち主は、私たちが知っているあの象ではない。なんと、今では絶滅してしまっているマンモスなのであった。

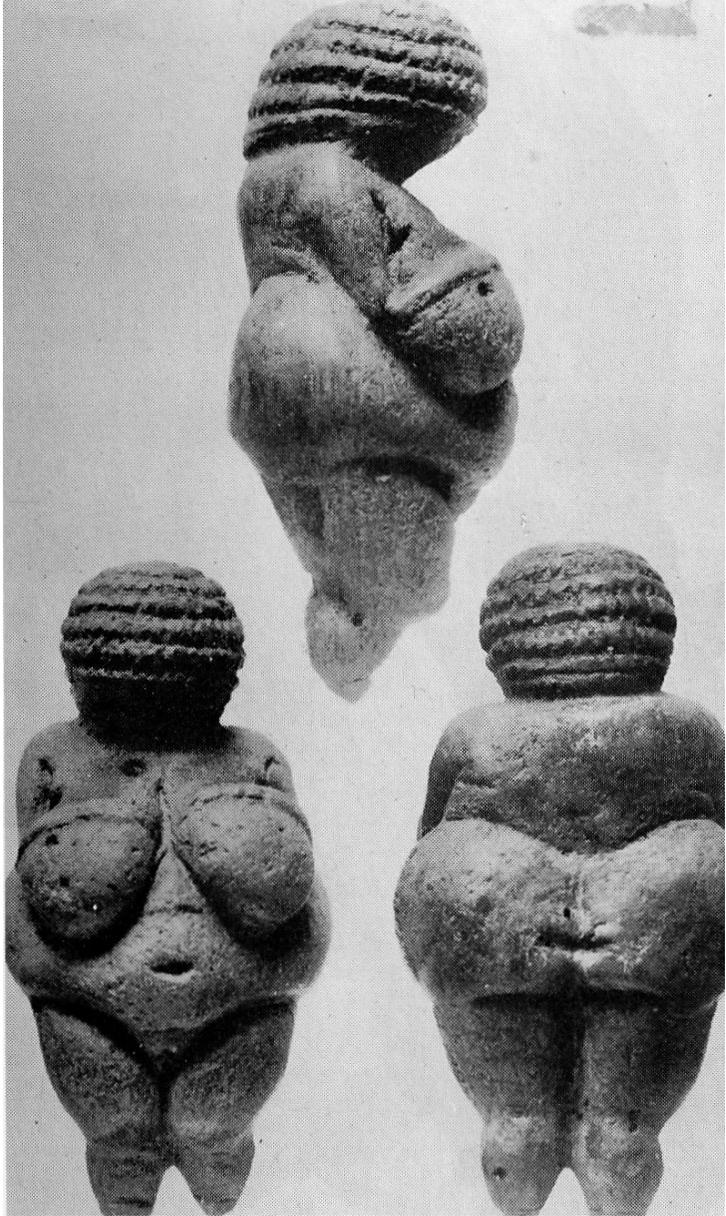
レスピュエーグのヴィーナス.jpg



右 レスピューグのヴィーナス

次に紹介するのが「ヴィレンドルフのヴィーナス」である。

オーストリアのヴィレンドルフで、一九〇八年に発見された。こちらも十一センチメートルほどの小像であるが、象牙ではなく、石灰岩で作られている。やはり二万年以上前に制作されたらしい。



ヴィレンドルフのヴィーナス .jpg

右 ヴィレンドルフのヴィーナス

余談であるが、このヴィレンドルフのヴィーナスをモデルにして、手塚治虫さんが「ムネーモシユネー」というキャラクターを創作している。『はるばら』という漫画に出てくるのだが、かかるムネーモシユネーは、ミューズ（芸術の女神）の母親役である。

ちなみにムネーモシユネーは、ギリシア語で「記憶」を意味する。

妊娠しているヴィーナス

レスピューグ、ヴィレンドルフ、これらのヴィーナスを一瞥しただけで分かるのは、その腹部が大きく膨らんでいることだ。

もちろん胸も臀部も異常なまでに大きい、それらの部位が大きいということ自体は、ヘルメスの杖のフォルムとも合致している。

よってこれを「いまだ女性美の範疇内にある造形である」と言っても間違いではないだろう。いや、言うまでもなく「過ぎたるは猶及ばざるが如し」という意味での不恰好さは認めなければならぬけれども。いずれにしても、ここで注目すべき点は、二つのヴィーナス像の腹部が膨らんでいることである。こればかりは、どうしてもヘルメスの杖のフォルムと合致しない。

しかしこの問題も、レスピューグやヴィレンドルフのヴィーナスをして、それが「人々が大地の豊穡を祈るためのシンボルであった」と仮定すれば——そのときには「なぜ小像をそのような造形にしたか」という疑問は、たちまちのうちに氷解してしまう。

すなわち、ヴィーナスたちは「妊娠」しているのである。妊娠すれば、たとえ痩せた女性であっても、その腹部は勝手に膨らんでいく。そう、彼女たちは別に、単に弛んだ腹回りを見せつけている訳ではないのだ。

大地母神の像

妊娠しているのであれば、疑うべくもなく、二つのヴィーナスは、その胎内に胎児を抱えている。

そして、その胎児は、彼女らの大きな腰回りから、スッと無事に生まれてくることになる。この上もない安産によってである。そうして元気な泣き声を上げながら、あの豊かな乳房から溢れるほどの乳を吸うことになるのだ。

そして、ここまで語れば、もう自ずと答えは見えてくる。そう、レスピューグのヴィーナスも、ヴィレンドルフのヴィーナスも「大地母神」なのである。

大地母神とは、その名のとおり、大地の豊穡をつかさどる女神のことである。

読者が直接知っているところでは、私の戯曲である『ディオニュソス』に出てきたキュベレーが、紛うことなき大地母神であった。それと同じように、二人のヴィーナスもまた、かの大地母神の模り（かたどり）に他ならないのである。

そして、そうだとすれば、レスピュエグでもヴィレンドルフでも、かつては——キュベレー神殿におけるような——性的オルギアの祭りが行われていたのだろう。

まだマンモスが闊歩している時代であって、大地の豊穡を祈りつつ、人々は男女の混交にふけていたのである。

それは古代の人間にとっては、ごく自然な宗教性のあらわれに過ぎなかった。

（2）農耕を許さなかった神

蔑ろにされたカイン

しかし、そのように自然な宗教性を許さなかった神もいた。それが旧約聖書の神ヤハウエである。

そのことが明瞭に示されているのが「カインとアベル」の物語だ。

カインとアベル——この名を知っている読者も多かろう。この二人は人類初の兄弟で、いずれも人祖アダムの子供である。創世記（新共同訳）には次のようにある。

「アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。

時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。

主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた」

整理しておく、兄のカインは農耕者であり、弟のアベルは牧羊者ということになる。

ということは、ヤハウエは遊牧（牧羊）の生活は祝福したが、農耕の生活のほうは、にべもなく否定したのである。

それはなぜか。農耕とは大地の恵みに依存する生活であり、そこで宗教性を発揮すれば、当然のこと、大地母神を祀った性的オルギアに行きつくからである。それは、前節で見たレスピュエグやヴィレンドルフでも、普通に行われていたことである。

しかしながらヤハウエは、人間に「自我の確立」を求める神なのである。それがこの神の役割である。それだから彼には、どうしてもカインの生き方を肯定することが出来なかった。それでカインとその献げ物には目を留めなかった。

しかし当然、カインはこれが面白くない。というより、弟のアベルが恨めしい。自分を否定した神さ

ま（ヤハウエ）を憎むわけにはいかないからだ。それは、不倫が生じたとき、妻が、夫ではなく浮気相手の女のほうを憎むのによく似ている。

そのためカインは、深く弟を恨み、最終的にアベルを殺してしまった。アダムが最初の人間であるように、西洋ではこれが「人類最初の殺人」であるとされる。聖書には、

「カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した」とある。

遊牧者カイン

これを知り、ヤハウエはカインに詰め寄った。

「何とということをしたのか。お前の弟の血が、土の中からわたしに向かって叫んでいる。今、お前は呪われる者となった。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」

こうしてカインは、二度と農耕に従事することが出来なくなった。たとえ土を耕しても、その土は呪われているので、もはやまともな作物を産することがないためだ。

そこでカインは、地上をさまよい、さすらう者となった。つまり故郷から見放された放浪者となったのである。

しかし、このとき彼の手元には、おそらく、弟アベルの遺産である、羊たちが遺されていた。

そこでカインは、この羊たちを引き連れたうえで、土地から土地をさすらったのではないだろうか。私には、そのように想像されるのである。

これは言葉を変えれば、カインが遊牧の生活を始めたということである。結局ヤハウエは、ここでもまた遊牧生活を肯定、推奨したのである。

それは何故かという点、結局、遊牧の生活には「自我の確立」につながる要因が多いからである。

寄留民の倫理

基本的に、遊牧民は自分の土地を持たない。そのため、土地から土地へと渡り歩くのが、彼らの日常生活となる。そうした彼らがひとたび町（オアシス）に入れば、その立場は「寄留者」でしかない。

寄留民とは、要するに、ある社会の中において正規の（＝制度的な）位置づけを持たない人々のことである。その社会にあって、何の地盤も後ろ盾もない存在である。

そうした立場に置かれたとき、彼らにとっての「生きるための武器」となるのは何だろう。

それは——侵略行為を別にすれば——町の人々を相手に、誠実なビジネスを行うこと。そうした誠実なビジネスケースを重ねながら、自分たちへの信頼度を徐々に高めていくこと。それだけである。

そして、この生き方が「契約関係」という、自我確立のメルクマールとも言うべき倫理観を育成することになる。よく言われることだが「持続可能な」商法は正法なのである。

ヤハウエがカインに、ひいてはイスラエル民族に求めたのは、これではなかったか。カインは、実際にそのような生活をしたのではないか。あるいは、神に望まれるも、実際にはそこまでのことは出来なかったもので、仕方なく「遊牧者カインの物語」は、聖書のなかで割愛されたのではないか。

(3) 土地取得による農耕民族化

遊牧者が求めるもの

ところで、遊牧者カインの姿は——それがあったと仮定してのことだが——同じように遊牧者であったアブラハム、イサク、ヤコブの先取りであるとも言える。

そしてカインの子孫である彼らは、さすらいことの寄る辺なさから——その状態から逃れるために——「自分自身のもの」と呼べる土地を求めてやまなかった。人間、誰だって自分の故郷と呼べるような土地が欲しいものなのだ。

これは、とくにアブラハムにおいて著しいことであるが、彼は土地の取得のために、寄留民として、つねに誠実なビジネスを心がけていた。商売相手のカスタマーハラスメントのような要求に対しても、出来る限り誠実に対応した。

そうした辛苦（誠実な契約履行）のはてに、アブラハムが獲得したのは、結局、猫の額ほどの小さな土地でしかなかった。

けれども彼は、その土地をどんなに大切に扱ったことだろう。彼の子や孫は、その土地をどんなに尊重したことだろう。私には、そうした彼らのあり方が、何だか健気に見えてしまう。

そして、そのような遊牧者たちの姿を、ヤハウエは確かに嘉したのだった。

カナン定住

ところが、彼らの遠い子孫であるイスラエル民族は、自分たちの生活スタイルを、一八〇度きり替えてしまった。さすらい人の生活スタイルから、自分たちの土地を持つ「定住民」のそれへと、である。

というのも、出エジプトを経た彼らは、カナンの地に、自分たちの領土を獲得していたのである。アブラハムの時代とは比べ物にならないほど広大な土地を。

彼ら新イスラエル人たちは、そこで「土地持ちの農耕民」としての生活を始めた。温暖な地域に土地があれば農耕を行わない手はないし、それは確実に、安定した収入と生活を約束してくれるのだ。よって、この転職の流れは必然でさえある。

しかし、農耕を始めれば、豊作を願う人たちの宗教性は、どうしても大地母神の恵みを求めるものへ傾倒してしまう。すでにカナンにはアシュタロテや、その子供であるバールの自然宗教があったから、なおさらこの傾倒のスピードは速まっただろう。

事実イスラエルの民は、あっという間に、この「アシュタロテ・バール」の自然宗教に染まっていった。そこには性的オルギアが伴っていた。

そのため、ここで再び、カインとアベルの物語が繰り返されることになる。ヤハウエはカインの宗教（農耕豊穡の宗教）を断罪し、イスラエルの民に、遊牧民的な宗教性を求めたのである。

「モーセの律法（＝自我確立のためのメソッド）に立ち戻れ！」

一言で言えば、それがヤハウエが求めたことだった。

そして、その促しとなるようヤハウエは、農耕民族化するイスラエルの民に、外患という刺激を与える。要するに彼らは、他民族からの攻撃を受けるようになったのである。ペリシテ人からの攻撃が主であるが、これは、刺激というよりは「罰」と言ったほうがいいだろう。

罰と立ち返り

そのような罰を与えられた民は、再度ヤハウエに嘉されるよう、リーダー（士師）の指導のもとに自然宗教を捨てる。つまりモーセの律法に立ち返るわけであるが、これによってイスラエルは復興することになる。

しかし「喉元過ぎれば熱さを忘れる」を地でいくような忘却によって、彼らはまたしても「アシュタロテ・バール」等の自然宗教に引き戻されてしまう。そこからまた外患が始まり、それに懲りて農耕宗教の否定が始まる——この繰り返しだが『士師記』の骨組みである。

もっとも、このパターンは王政時代になっても収まらず、それが途切れたのは、サウルとダビデの治世時代だけだったかもしれない。ソロモンより後は、『士師記』の士師が預言者に代わっただけのバージョンだと言えよう。

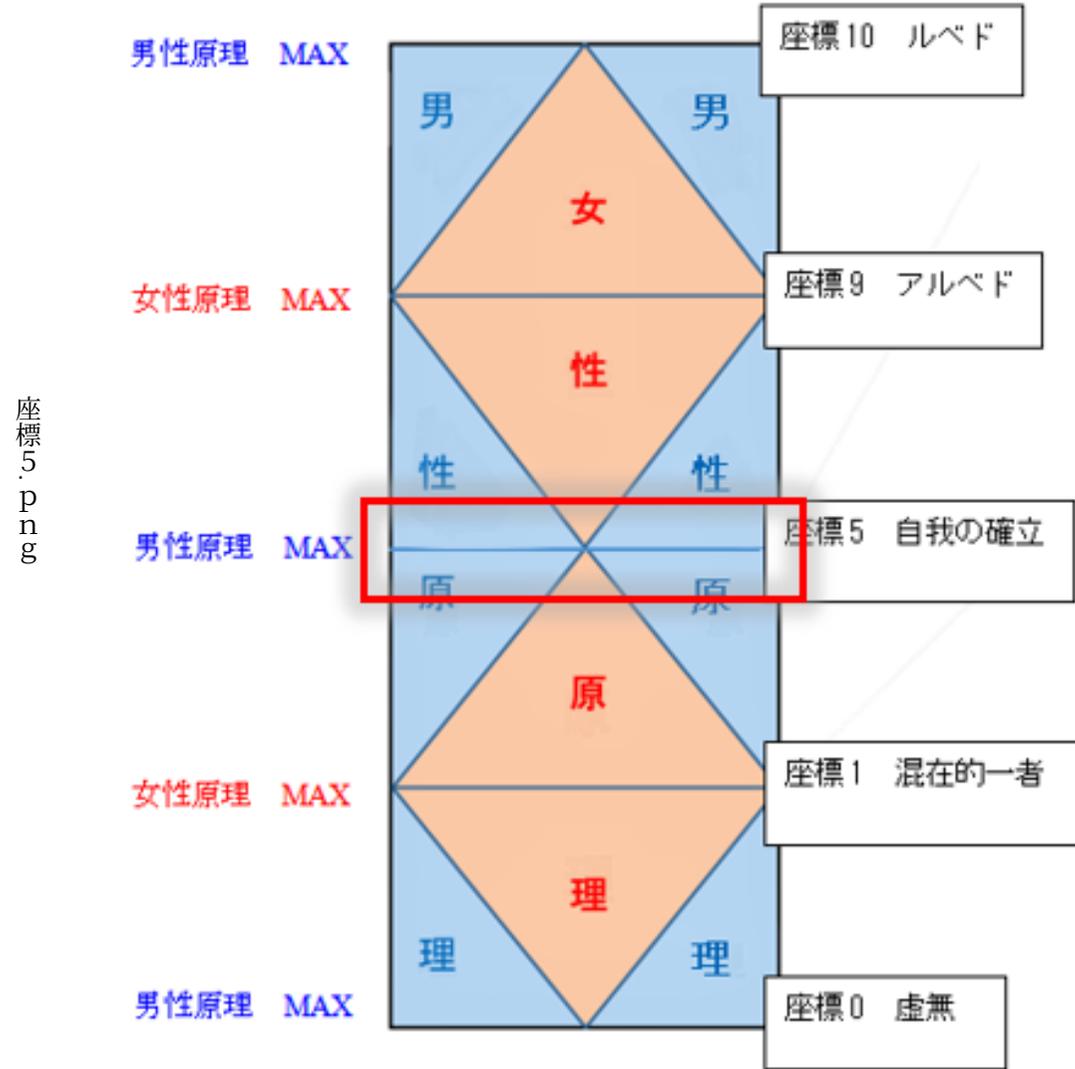
この延々と終わらないサイクルを断絶するために、ヤハウエは「バビロン捕囚」という荒療治を必要としたほどだった。そして、その苦難のなかから、ついにパリサイ人のような、徹底したアンチ農耕宗教集団が登場することになる。

さらに後年には「農耕化の元凶は土地の保有に他ならない」とばかりに、ヤハウエが、ユダヤ民族から、完全に「自分たちの領国」を奪い去る時代がやってくるのである。それによりユダヤ人は世界的な「さすらい人（遊牧民的立場）」となったのだった。

第3章 ビジネスマンとキャリアウーマン（座標5）

（1）非情にしてドライな良識人

原理図



きわめて男性的な男性

ここでは、まず男性側の事情から追ってみたい。

右の原理図を見れば明らかのように、座標5は、男性原理が最も強くはたらく心境である。よって四角い枠のなかは、ほとんど水色一色になっている。

したがって、この座標に定位する男性は、両性具有の概念からは最も遠い存在である。彼のことを――奇妙な言い方であることを承知のうえで――表現すれば、きっと「きわめて男性的な男性」ということになるだろう。

そうした上での問いとなるが、では「男性的である」とはどういうことか。

それは端的に言う、彼のなかで、男性原理の「分ける」性質が強調されているということである。

優秀な存在

これについて、順を追って説明しよう。

かの同一化や手段化という「他者との混在要因」を排して、いまや彼は、きわだって個性的な存在となっている。自分なりの意見を持ち、かかる意見に対して、それに見合うぶんだけの責任感を持ち合せている。

そして、高度な分析力と、その分析によって露にした素因を、因果的に構成することが出来る。この「合理性（＝必然性を獲得した因果律）」によって、あらかじめの虚偽を排した「真実」を手に行っている。

さらに彼は、不合理な人情にほだされることなく、契約関係というパートナーシップによって、共同社会の構成員たろうとする。

そして、この契約関係を破壊するものを「悪」と考える彼は、その悪から自分自身を峻別し、それにより己を「正義の体現者」たらしめようと努力するのである。

こうして見てくると、座標5に定位する男性は、人格的にも能力的にも、きわめて優秀にして良識的であるように思われてくる。ことにビジネスマンとしては、彼は最大限に優秀な人材となるだろう。

ところが、そうした彼にも、ある致命的な欠点がある。それは彼があまりにも、非情でドライになってしまっているということだ。

ギスギスした人間関係

彼はあまりにも極端に「分ける」ことに特化してしまった。それにより、自分と他人を結びつけることに、ある種の困惑を覚えるようになってしまった。

むしろ契約で結ばれた関係は、社会的には肯定されるだろうし、祝福もされるだろう。だがそれは、血の通った人間関係としては、いかにも強張ってギスギスしてしまっている。

一例を挙げれば結婚契約がそれだ。契約を守りきる彼は、きっと浮気などはしないのだろう。誠実に、社会的な「夫の務め」を果たすのだろう。けれども、では彼の妻が浮気したときにはどうするのか。

きっと理想的には「即離婚」しかあるまい。しかも妻の浮気が、あまりにもドライな夫への不満に、その端を発しているのにも関わらず。これは極端な例であるが、こういう例も、あながちなくはないと思う。そうなると、これは、ひどく「救われない状態」ではあるまいか。

確かに、カチコチの契約遵守者である彼が述べることは、きっと一分の隙もないほど正しいものなのだろう。

しかし、その正しさは、結局のところ、たんなる社会的正義に過ぎない。そしてそれは、女性側からすれば「そんな正しさに何の意味があるのか」と責め立てずにはいられないような、いわくつきの「正しさ」なのである。

そのように偏向した「正しさ」に殉じていることで、非常にしてドライになってしまった「救われない男性」には、どうしても彼を救ってやる存在が必要である。そして、それこそが私がここで紹介する「キャリアウーマン」なのである。

（2）男性化した女性

キャリアウーマンとは

すでに述べたように、座標5では、男性がことさらに男性化する。もう少しまともな日本語で言えば、男性のなかの「男性性」が、極端化して表れてくる。

したがって、この状態は、ヘルマプロディトスの両性具有からは最も遠い「単性偏向」ということになる。

となれば、この座標5において「ヘルマプロディトス」の肩書きを担うのは、どうしても女性たちとということになるだろう。

実際、この座標に至った女性は、精神的に——ときには肉体的にも——かなりの男性化を遂げることになる。

それはまさにヘルマプロディトスの状態であり、彼女らは、男性化された女性として、社会進出にも積極的な姿勢を見せる。この社会進出を、ビジネス界への進出と言い換えてもいい。

一般に、こうした女性たちが「キャリアウーマン」と呼ばれることになる。一般的な定義としては、職業を持ち、とくに専門的な知識や技術を必要とする仕事に就いている女性たちを指す。あるいは、女性長期賃金労働者とも訳される。

女性が座標5を目指すこと

彼女たちキャリアウーマンは、それまでの仕事のなかで、間違いなく様々な苦勞を味わってきた存在である。しかし彼女らは、蹉跎や孤独といった苦難にも屈することなく、ついに座標5という、高次の心境へと達したのだった。

これを逆にいえば「女性が社会進出をすれば、自動的に座標5的なキャリアウーマンになれるという訳ではない」ということになる。

事実、この座標に達するためには、社会環境への適応力と、さらに、その環境に呑み込まれないだけの自立性が不可欠なのである。この高いハードルを越えた女性たちだけが、ここで言うところの「キャリアウーマン」になれるのだ。

いくら職業女性であっても、仕事内容への適応もままならず、息を吐くようにして環境への不満を口にするならば、彼女の心境は、座標5のそれには、はるかに遠い。

しかも、そうした「不満たらたら」の女性たちの姿は、現実の会社のなかに、いくらでも見つけることができる。彼女たちは、むしろ教育の段階（座標3あたり）の体現者であると言っていいたいだろう。

孤独な女性たち

さて、あらためて座標5に達したキャリアウーマンを眺めてみよう。

概して彼女らに見られるのは、その男性化の代償として負わされた「結びつける能力」の薄弱さである。元来女性は、持ち前の女性原理の発露として「結びつけること」を得意にしているものである。人と人とのあいだに潤滑油のような愛嬌をふりまき、ときには自分と他人との間隙をあっさり埋めてしまう。そういう優れた関係樹立能力が、自然体の女性には、少なからず見て取れる。

ところが、自ら進んで男性化し「分けること」に慣れてしまったキャリアウーマンは、往々にして、人と人とのあいだに、ぎこちない谷間を作ってしまう。そして、その谷間のゆえに、彼女はしばしば、寂しく孤独な時間を味わうことになるのだ。

ときに私は、タバコというものを「孤独な自我の支え棒」だと考えている。それだから、タバコを片手に書類を眺めている女性などを見ると、彼女の孤独感が差し迫ってくるようで、なんだか一途に胸が痛くなってきてしまう。そうして、

「女よ、お前はかつて、足下の大地にしっかりと身を支えられていた存在ではなかったか。タバコのよいうな『か細い棒切れ』で支えられる必要など、全くない存在ではなかったか」などと、心の中で嘆息してしまうのである。

それはそうとして、もし彼女たちが、最後の一线で女性らしさ（結びつけること）を失わなかった場合——両性具有のヘルムプロディトス化が成功している場合——彼女たちには、社会のなかで「大いなる肯定的役割を演じる資格」が与えられることになる。

（3）キャリアウーマンの肯定面

セラピストの役割

大いなる肯定的役割——それは彼女たちが「男性化の極みにある男性たち」に、人間関係回復のリハビリテーションを施すという役割である。つまりキャリアウーマンは、一種のセラピストになれるというのだ。

この場合、彼女たちにとって最大の武器となるのは「仕事をしている男性の気持ちが分かる」ということである。

それは、社会や会社から縁遠い専業主婦には、まず分からない気持ちが分かるということである。これを「仕事場では生起せざるを得ない軋轢への理解力」と換言してもいいだろう。

要するにキャリアウーマンは、ビジネスマンにとっての戦友なのである。仕事場という戦場で、ともに武器をとって戦ってきた歴史が、互いの理解を何よりも深めることになるのである。

畢竟、ともに戦ってきた友の言葉には、十分に信用に足るものがある。非情でドライになってしまった男性でも、こうした戦友の言葉であれば、そこに耳を傾けるべき価値を見出すことが出来るのだ。

勢いが無いという美德

しかもキャリアウーマンは、ご承知のとおり「結びつけること」に熱心ではなくなっている。それは男性化の代償であるが、極端に男性化した社会のなかにあっては、ひとつの美德にもなっている。

というのも、彼女らが男性に向かって差し伸べる手は、ときに男性を怯えさせるような「勢い」を持たないからである。

じつに、座標5に定位している男性は、この「勢い」に困惑せずにはいられない。ただしこの勢いは、必ずしも、言動が積極的という意味ではない。むしろ女性側に、その「女性であること」の要素が強く感じられるということである。

女性性の強調——それは彼女がセクシーであること、肉感的であること、男に無理をさせまいとすること（＝無用な甘さ）、触れ合いが過剰であること、などである。

本章で考察しているようなビジネスマンは、こうした「勢い」に圧されて、半ば怯えてしまう。それは、こうした女性側の勢いが、彼の「分けること」を主体とした日常生活にとって、あまりにも異質なものである。

それよりは、勢いなく差し伸べられた手を、サラッと握り返せたほうが、男性側としては、よほど心

的負担が少ない。のみならず、相手の「勢い」のうちに自分を見失うリスク、これもまた容易に回避することが出来る。

そして、女性の側にあって、そうした「勢いのない」手の差し伸べかたが出来るのが、キャリアウーマンに他ならないのである。

嘆きの天使

むろん人間には「異質だからこそ大きな魅力を感じる」という側面もある。しかし、その剥き出しの女性的魅力の虜となった場合、座標5に定位する男性のもとに訪れるのは、たいていの場合は「それまでの生活の破綻」という悲劇なのである。

というのも「異質である」とは、換言すれば「それに慣れていない」「得意ではない」ということだからだ。そして人間、慣れてもおらず、得意でもない事に関しては、どうしても、度々ハマを演じずにはおられないのである。

その極端な事例をフィルム化したのが『嘆きの天使』という名作映画であろう。

といっても、この映画のことを知っている読者は、ごく少数であるに違いない。あまりにも古い映画だからだ。

私も本作を知らなかったうちの一人であるが、これが偶々、二十代後半に読んだ、ユングの『人間と象徴』で紹介されていた。私はそれをツテにして、映画自体に行き着いたのだった。

一九三〇年の公開なので、かなり不鮮明な白黒映画ではある。それでもDVDをレンタルして視聴してみたのだった。

そうしてみると、この映画の主人公は、絵に描いたように謹厳実直な英語教師である。そんな彼は、生徒が持っていたプロマイドから、地方巡業している舞踏団（キャバレー）の踊り子との「出会いの縁」を持つことになる。

そうして彼女に惹かれていく訳であるが、私としては、何としても教師（主人公）の動向が危なっかしくて、とても直視してられない。彼がまさに「慣れていない」「得意ではない」ことをやっているのが分かるのだ。

そして、そのラストシーンこそは、悲哀の極みだった。

踊り子のために、キャバレーの道化役にまで身を落とした教師は、その踊り子が別の男とキスをしているところを目にする。教師だった男は、ガックリと肩を落しながら失踪。その翌朝、かつての勤め先だった中学校の教室で「首吊り死体として」発見されるのである。

成功者の夫婦

右の教師の凋落ぶりこそは、リハビリテーションなしに「勢いのある女性性」に溺れていった「非情

でドライな男性」の典型的末路である。そして、勢いのある女性性とは、要するに、性的オルギアの雰囲気醸し出す「座標1」的な色香なのである。

そのような色香に籠絡されて破滅に至る——女性関係において、このような危険性を孕むのが「非情でドライな男性」である。そうした彼らを十全に救うのは、やはり座標5に達している「ヘルマプロディトス化した女性」ではないだろうか。

彼女の色気のない手に救われた男性は、たしかに強烈な恋愛体験に恵まれることはないかもしれない。しかし、そうであればこそ彼は、それまで培ってきた社会的地位を失う可能性も低いのである。よって彼が、穏やかな結婚生活を、生涯の終わりまで送れる可能性は高い。

事実、私たちが世間で目にする「成功者の夫婦」は、この状態に類する人々が多いのである。派手さはないものの、そこにはきつと、社会的エリートが発する、落ち着いて穏やかな雰囲気漂っているはずだ。

第4章
リリト

(1) フェミニニズムの象徴

男性化する女性

座標5のヘルマプロディトスは「女性の男性化」だった。これは座標5の「自我の確立」に、女性側が大きく影響をうけた結果といえる。言うまでもなく「自我の確立」は、男性原理（＝分けること）によって成し遂げられるものだ。

もっとも、彼女の心全体を眺めたとき、その半分ぐらいは「女性的な部分」が残っていないと、正確な意味での両性具有とはならない。

それ以上に多くの男性性を受け容れてしまうと、それはもうヘルマプロディトスではなく、むしろ「男性性の過剰状態」ということになるだろう。つまりヘルマプロディトスとして「いびつ」になっているということである。

しかし、このいびつな「男性性の過剰状態」を見事に体现していたのが、一九七〇年代に盛り上がった、フェミニズム運動の担い手たちである。

フェミニズム運動とは、性差別をなくし、男女が平等に生きていくことを目的とした運動のことをいう。これをウーマンリブとも言い、日本語では「女性解放運動」と訳されている。

ウーマンリブの問題点

しかし、ウーマンリブの本質は明らかに「男性性の過剰状態」である。事実そうであるため、一般人の眼にとり、彼女たちは「せっかくの女性の優れた特性を、無駄に捨て去ってしまった者たち」として見えた。

色彩論的に言えば、赤（男性）と「明度」を同じくするはずの緑（女性）が、自ら「緑よりも赤がいい」と言い出したようなものである。不用意に緑に赤を混ぜれば、その色はただただ汚くなり、かつまた明度も下がるのである。

本来緑は、ただ純粹に緑であることを発揮すれば、それだけで赤と等価になれる色なのである。女性の植物的な優美さは、男性の動物的な活発さと、その価値をまったく等しくするのである。

ならば、ヘルマプロディトス化した女性には、男にはない優美さを主体にして、それを積極的に、活発に表現してもらいたいものである。

私などは、とくに女流の画家や音楽家にそうした「積極的に表現された優美さ」を感じる。画家のマリー・ローランサンや、女流のヴァイオリニストなどが典型であるが、それだと、余りに対象を限定しすぎていられるかもしれない。

となれば、あえて曖昧な表現で「主にビジネスの場であって、仕事ができるのに落ち着いていて優しい」とでも言うておくべきだろうか。
ヒステリー気質を、仕事ができることと勘違いしている女性も多いが、ヘルマプロデイトスの状態は、ほとんどその逆だということである。

その——とくに悪いほうの——具体例を挙げるのも容易だ。が、これは穿って突けば、いくらでも埃が出るテーマなので、右程度の漠然性で覆っておいたほうが、意見としては無難かもしれない。

一応ここでは、優しくて仕事ができるキャリアウーマンあたりを「理想的なヘルマプロデイトス的な女性像」としてよくことにしよう。

男女平等のシンボル

しかし、明らかに「仕事ができるのに落ち着いていて優しい」でないのがウーマンリブの旗手たちである。

彼女らは、極めて声高に、これ見よがしに「男女平等」の声を上げる。まるで、男たちが埃をまき上げながら行進するかのようである。それは本当に、すね毛の生えた筋肉質の足で、ドタドタと前に進むかのような「行進」とも評せよう。

そこには当然、優美さなどは欠片ほどもない。反対に彼女たちは、私たちに、ただ一途に、男性化した女性の「いやなところ」ばかりを見せつけるのである。

そして、こうした「男性性の過剰状態にある女性たち」が、自分たちの活動のシンボルとして担ぎ出したのが「リリト」という神話的存在だった。

——リリトを、現代のフェミニズムのシンボルとして見直そうとする運動が起こっている。その運動の中でもっとも注目すべき動きは、分析心理学のユング派の第三世代のフェミニストたちであり、また、アメリカのユダヤ教会の内部から起こった女性の平等運動である。(中略)彼女たちは自ら「リリト・グループ」と名乗った。

上山安敏『魔女とキリスト教』より

(2) リリトの神話

リリトとは何者か

このリリトとは何者だろう。私の場合、最初にその名前を知ったのは、ゲーテの『ファウスト』においてであった。第一部の「ワルプルギスの夜」の場面で、雑踏のただ中にいたファウストが、突然リリトを見つけてのさ。

ファウスト あれは、いったい、誰だい？

メフィスト ようく見てごらんなさいよ！ リーリトですわ。

ファウスト 誰だって？

メフィスト アダムのかみさんですよ。

あのきれいな髪に用心することすな。

あれだけがとびきり自慢の一点豪華主義でね。

あれで若い男をつかまえたら最後、

いっかな離しやしませんぞ。（山下肇訳）

メフィストーフェレスが言うように、リリトは、アダムがエヴァと結婚するまえの、アダムの最初の妻である。

しかし、正典の聖書には、彼女についての記述は、たった一か所にしかない。しかも完全なる魔女扱いであり、新共同訳では名前すら伏せられている。

荒野の獣はジャッカルに出会い

山羊の魔人はその友を呼び

夜の魔女は、そこに休息を求め

休む所を見つける。（新共同訳『イザヤ書』三四章より）

この夜の魔女がリリトであり、より原文に忠実に訳すると次のような文章になる。

——荒野では動物が死体を食いあさった。リリトは滅亡後のエドムの廃墟に野獣とともに住み着いた（上山安敏訳）。

不気味な廃墟に住まい、死体を食いあさる猛獣とともに暮らす魔女、それが旧約聖書のリリトある。これが本当にアダムの最初の妻なのだろうか。

アダムの最初の妻

これが本当なのである。少なくともユダヤ教の教義では、そのようになっていて。

話を整理すると『創世記』の第一章では、人間の男女が同時に現れたことになっており、そこにはこ

う書かれている。

神はご自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

このときアダム（男）と同時に生まれたのがリリト（女）で、アダムと同様に土を材料にして創られた。

したがって、この時点では、男女は完全に平等ということになる。フェミニズムの運動家が、リリトを旗印にした根本的理由は、まさしくここにあると言えるだろう。

これが「アダムの肋骨から、後天的に生み出された」エヴァであっては、男女平等のシンボルには到底なりえない。明らかに役不足である。

そもそもアダムとリリトが生まれたときには、エヴァはまだ人間として存在していない。彼女はそのとき、アダムの肋骨として存在していただけだった。

（3） アダムとリリトの結婚と離婚

セックス上の失敗

しかし、アダムとリリトの共同生活は、二人にとって満足のいく結果をもたらさなかった。何より二人は、夫婦生活（セックス）で躓いてしまったのである。

アダムは、リリトとセックスするために、彼女に「横になってくれ」と要求した。アダムは、いわゆる正常位での接合を望んだのである。これは私たちには普通のことと思える。

ところが、これにリリトが猛烈に反発して言う。

「そのような体位を取るとしたら、私が下になり、お前が上になるではないか。もともと私たち二人は、同じ土から作られた存在だ。なのに、ここで上下の差が生じるのは、少なくとも私には納得できない。それどころか、これは私に対する侮辱ではなからうか。だったら……」

一説によれば、このときリリトは、アダムに騎乗位を要求したという。騎乗位であれば、男が下、女が上ということになる。だが、どうひいき目に見ても、この要求は、リリト側の歪んだ「男性性の過剰状態」であろう。

しかし、己の性欲に煽られているアダムにとって、こうした議論は、あまりにも煩わしかったらしい。つまり彼は面倒くさくなったのだ。そのため、この人類最初の男は、もはや黙って、無理やりリリトに

のしかかることにした。

アダムの腕が、無言でリリトの体を押し倒す。となればリリトの真上にアダムがいる。だが、この一方的なマウント行為に怒ったリリトは、力の限りでアダムを押しつけると、神の名を呼んでこう叫んだ。「ムリムリ！　神よ、私はもうコイツなんかと一緒にはいられません！　私は、この家（？）を出させてもらいます！」

とまあ、このような事があったらしい。リリトのセリフは私の創作であるが、もとのストーリーを捻じ曲げてはいない。

そして当然、これが人類最初の離婚であった。リリトは空中に飛び上がると、アダムのもとを去って行ってしまったのである。

悪魔になったリリト

上山安敏氏によると、こうして「性における男女の平等を要求したりリリトはそのために悪魔にされた」のだという。

それというのも「キリスト教が支配的になって、男上位が宣教師の説く正しい体位とされ、女上位は悪誘惑とされて贖罪の対象になった」からである。男上位とは正常位、女上位とは騎乗位のことだ。

かくして独りになったアダムは、リリトを自分のもとに戻してくれるよう、神に祈った。神は三人の天使を遣わし、紅海に逃げていたリリトに説得を試みる。

はじめ彼女は、その説得を全く受け付けなかったが「その強情は、そなたの罪である」と言われて軟化。ひとまずアダムのところに戻ることにした。

とはいえ、このときには、すでにリリトの悪魔化が始まっていたのであろう。彼女は、時を同じくして、次のような恐ろしいことを口にしたのである。

「だが私は、生後八日までの男児に危害を加えることを誓う！」

これによって、新生児のためのお守りが、ユダヤ人の習慣となった。

別説による同場面

別説では、三人の天使たちが、紅海でリリトを見つけると、彼ら天使たちは、次のような、まことに天使らしからぬ脅迫を行ったという。

「このままアダムから逃げたままでいるなら、毎日お前の子供たちのうちの100人を殺すぞ」

このような脅迫が成立するとすれば、リリトは、単性で子供を出産できる体質だったことになる。しかも多産の上にも多産なようだ。

いずれにせよ、それでもリリトは、アダムのもとに戻ることを拒絶した。そこで天使たちは、リリトを紅海の底に沈めようとする。呆氣にとられるほど残酷な天使たちの行動である。この奇怪な報復に対

して、リリトもまた奇怪な抗弁を放つ。

「私は生まれてくる子供を苦しめる者だ！」

正直言って、私には、この話の流れが少しも理解できない。それでもリリトは、これに付け加えて、「ただし三人の天使の名前（セノイ、サンセノイ、セマンゲロフ）を書いた護符を身に付けている子供には、危害を加えないでやろう」と言ったという。これによって、新生児のためのお守りが、ユダヤ人の習慣となった。

エヴァの登場

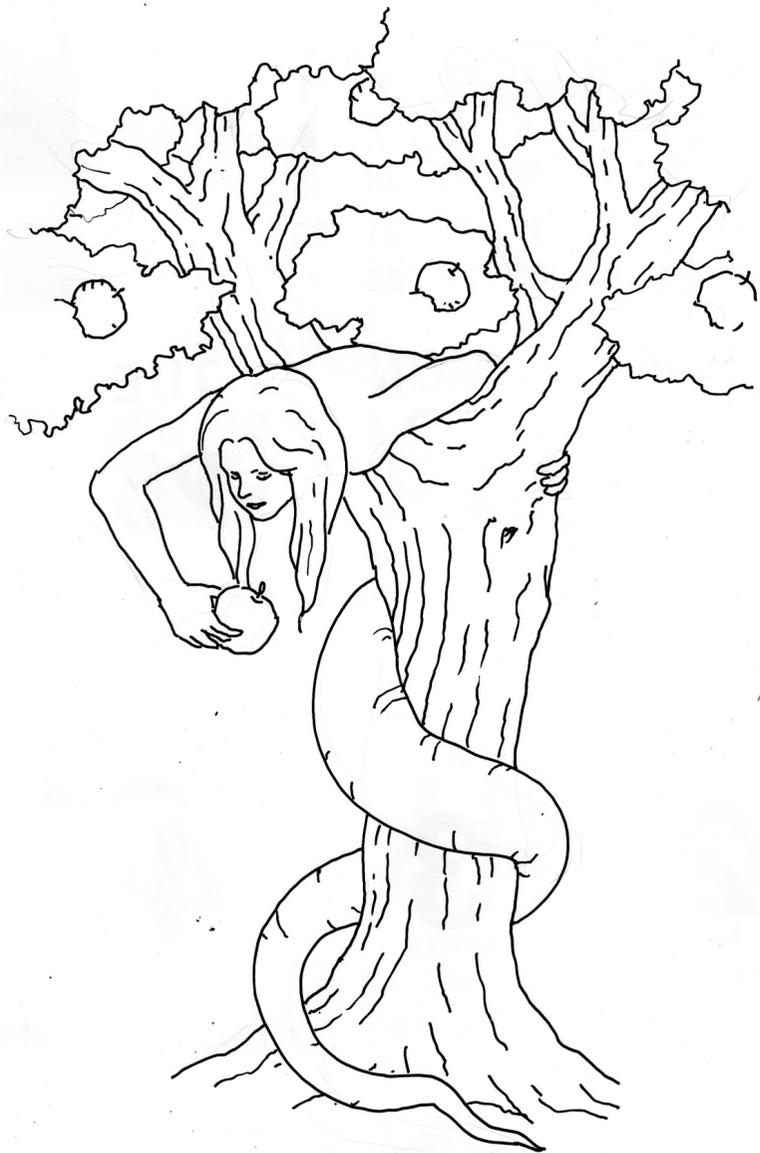
その後の、つまりアダムとリリトの再会後の具体的な話は分からない。再会したのかどうかも分からない。

それでも間違いないのは、この二人は上手くいかなかったということである。そうでなければ、アダムがエヴァと再婚するはずがないからだ。

ここにきて『創世記』は、ついに「女はアダムの肋骨から後天的に作られた」という男性優位のストーリーを語り始める。私たちがよく知っている、あの失樂園に至る物語である。具体的には『創世記』の第二章に書かれているエピソードだ。

ただし、ユダヤ教の別伝においては、エヴァに「善悪を知る木の実」を食べるよう唆した蛇こそは、リリトが変身した姿であったという。蛇＝リリトという訳だ。

הַיְיָ אֱלֹהֵינוּ יְהוָה



実際にそうであったとすれば、彼女のアダムに対する復讐は、十分に果たされたことになるだろう。なにしろ失樂園後のアダムは、額に汗して労働しなければならなかったし、エヴァはそんな夫に従わなければならなくなったのだから。すなわち人祖たちに、現世的な労苦が押しつけられたのである。

リリトとフェミニズム

ここまでリリトの物語を追ってきた。それによって分かるのは、リリトが声高なまでの男女平等主義であり、しかも「その実現のためならば、他のすべてを擲っても構わない」という強い信念を持っていることである。

これはフェミニズム運動に参加している女性たちにも共通することであり、であれば、彼女たちが、リリトを自分たちの旗印にしたことも充分に納得がいく。

だが「それにしたって」と違和感を持たざるを得ないのは、当のリリトが、どう見ても幸せそうに感じられないからだ。

これは比較論的な見解に過ぎないが、私たちの目には、アダムとリリトのペアよりかは、まだしもアダムとエヴァのペアのほうが、幸せそうな夫婦に見える。少なくとも、この二人は最後まで添い遂げた。かたや、リリトやフェミニズムの運動家は、諍いと孤独とを、宿命的にわが身に呼び込んでしまう。これは一体どういうことなのだろうか。

思うに、男女平等という理念は決して間違っていないし、無価値なものでもない。

けれども、この問題は極めてデリケートな性質を持っているものなのだ。そうであるのに、リリトやフェミニズムの運動家は、この問題に対し、あまりにも雑な取り組み方をしてはいないだろうか。

正直なところ私は、彼女らが、この「雑さ」の反作用を、ずっとその身に喰らい続けているように見えるのである。何より「本当の意味で幸せになれない」という形で。

付録

オウディウス『変身物語』より

序説2「ヘルマプロディトスの神話」の元になった記述をここで紹介しておく。すなわちオウディウスによる『変身物語』の一節である。

かなり文章を剪定してしまっているが、これはあまりにも饒舌なオウディウスの作風からすれば致し方ない処置であった。その点ご了承願いたい。

——メルクリウスとウェヌス（＝ヘルメスとアフロディーテ）とのあいだに生まれた男の子を、水の精たちがイダの山の洞窟で育てました。この子は両親に生き写しの顔立ちでしたが、名前も、両親の名から取って、ヘルム・アプロディトスというのでした。

十五歳になると、ふるさとの山を捨て、育ての親ともいうべきイダの山を離れました。見知らぬ国々をさまよい、はじめての河々を見ることが嬉しくて、そういう熱意が労苦を忘れさせていたのです。リキュアの町々や、リキュアに近いカリアにまでやってゆきます。底まで水の澄んだ池を見たのが、この地でのことだったのです。

そこには、沼地の葦も、実のならない水草も、先の尖った藺草もありません。水はすっかり透明なのです。ただ、まわりは、みずみずしい芝と、常緑の青草にとり囲まれています。

この泉に、ひとりの妖精が住んでいました。自分の泉に美しいからだを浸したり、黄楊の櫛で髪をかしたりしては、どうすれば自分にいちばん似合うかを、水に写った姿に問いかけています。少年「ヘルム・アプロディトス」の姿をみとめて、とたんに彼を自分のものになりたいと思ったのも、たまたま花摘みの最中でした。

それから「その名をサルマキスという妖精は、ヘルム・アプロディトスに向かって」次のように口をきりました。

「ねえ、お若いかた、まるで神さまのようにも見受けられますわ。もし神さまでいらっしゃるなら、さしづめクピードでいらっしゃいましょう。わたしは浮気の相手でいいのですし、誰も「かねてからの相手が」おありでなければ、わたしをそういうものとお考えくさいません？　わたしたち、結婚するのことにいたしましょうよ」

水の精はここで言葉を切りました。少年の顔が赤くなります。愛とはどういうものか、それを知ってはいなかったからです。でも、赤くなったということが、かえって彼の美しさを増しています。

妖精は、せめて姉妹の接吻をでもと、際限なく迫りながら、早くも、少年の項に手を回そうとしてい

るのです。その彼女に、「やめてったらー！」と少年はいいいます。

「でなければ、あちらへ行くよ。きみにも、この場所にもさよならだ」
サルマキスはおののいて、

「この場所は、あんたに任せるわ。「私は遠く引っ込んでいるから」どうぞお好きなように、坊ちゃん！」
とあって、うしろを向いて立ち去るようなふりをします。

少年のほうは、当然ながら、草原にはもう誰もいず、人に見られてはいないというつもりで、あちらこちらに歩を運び、やがて、ひたひたと寄せる泉のなかへ爪先を、それから足を踝まで、浸すのでした。
とおもうと、猶予をおかず「少年は」こころよい水の冷たさに心を奪われて、たおやかなからだから衣服を脱ぎすてます。

するとどうでしょう、何とも好ましいその姿！　サルマキスは、その裸身に焦がれて、燃え立ったのです。妖精の両の目も、爛々と光ります。

もう、じっとしてはいられない彼女です。喜びを先へのばすことはもうできません。

「わたしの勝ちよ！　とうとう手に入れたわ」水の精は叫びます。そして、衣服をすっかりかなぐり捨てると、ざぶんと水中に飛びこみました。

あらがう相手をつかまえ、無理じいに接吻を奪うと、手を下へ回して、強引に胸にさわり、前後左右から少年に抱きつきます。ついには、必死にさからってのがれようとする相手に、蛇のように巻きつくのです。

少年は、頑張り抜いて、待望の喜びを妖精に与えようとはしません。

「いっぽう」彼女は、からだを押しつけ、まるで糊づけされたかのように全身を合わせて、
「あがくがいいわ、いたずら小僧さん」と言います。

「どうしたって、逃げられないのよ。神さま、どうかお願いします、いついつまでもこのひとをわたしから、わたしをこのひとから、引き離さないでくださいますように！」

この願いを、神々さまはお聞きいれになりました。つまり、ふたりのからだは混ざりあって合一し、見たところ、ひとつの形になってしまったのです。ふたりは、しっかりと抱きあって合体したのです。

今や、彼らは、もうふたりではなくって、複合体ともいうべきものなのですが、女だとか男だとか称せられるものではなく、どちらでもなく、どちらでもあるというふうに見えるのです。

こうして、そこへはいった時には男であった自分を、この澄んだ水が「男女」に変え、水のなかでからだがふやけてしまったのを知ったヘルム・アプロディトスは、手をさしのべながら、もう男らしさを失った声でいいました、

「お父さん、お母さん！　おふたりの名を受けついであるあなたがたの息子の願いを、どうか聞きとどけてください！　この泉に浴した者はみんな、そこを出るときには男女となっていますように！
この水に触れるやいなや、からだが柔らかくなってしまいますように！」

両親は、心をうたれ、男女と変わった息子の言葉を聞きいれて、不浄の魔力をこの泉に与えたのです。
(中村善也訳)

参政党の躍進に関して

参政党の変貌

『国家防衛について』の巻末で、私は次のように記した。

——参議院選挙では、私も、もちろん投票に行く。

私が推すのは参政党だ。このマスコミに報道されることのない政党が、これからの日本を変えてくれるものと信じたい。彼らの政策は、もちろん『民間防衛』のイデーとも合致しているものだ——

これを書いた時点では、たしかに参政党の「大手マスコミにおける露出」は皆無であった。

しかし、参院選投票日の直前になって、この党は、一気に「国民に知られる存在」へと成り代わる。あまつさえ現在では、野党における支持率トップの政党にまで成長してしまった。これは驚くべき変化だと言わなければならない。

ここでは、その変化の過程について、簡単な素描を残しておきたいと思う。

政党要件を満たせない状況

そもそも参政党がマスコミに取り上げられなかったのは、この党が「政党要件」を満たしていなかったからだ。かかる政党要件とは、

「政治団体のうち、所属する国会議員を五人以上有するものであるか、直近の国政選挙で、全国を通して2パーセント以上の得票を得たもの」

というものだ。参政党は、この条件を満たしていなかったということである。じじつ参政党に所属する国会議員は四人だった。

表向きマスコミは、この条件を満たさない政党は、テレビの討論会にも呼ばないし、政党の名前も放送しない、というスタンスだった。まさに「弱小政党め、悔しかったら政党要件を満たしてみろ」である。といっても、これにはダブルスタンダードに近いものがあった。

つまり自分たちの思想に近い左翼政党であれば、マスコミは政党要件を満たしていなくとも、いくらでもテレビ上に登場させていたのである。社民党など、国会議員が一人か二人しかいないのに、堂々と

テレビ討論会に参加していた。

最後のドラゴンボール

そうした矛盾をはらみつつ、参議院選挙が始まる直前の参政党には、たしかに国会議員が四人しかいなかった。五人という「政党要件」まで、あと一人分の不足があったわけである。これには参政党の党首である神谷宗平氏も悔しい思いをしていたようだ。

ところが、ここで運命的な出会いが生じることになる。

というのも、少し前に「大阪維新の会」を離党していた国会議員、梅村みずほ氏が、SNS上において、右の「悔しがる神谷代表」の姿を見たのである。このとき梅村氏は、「私、もしかして七つ目のドラゴンボールを持つてるんちゃうん？」

と思ったそう。自分が参政党の黨員となれば、党所属の国会議員は五人となり、政党要件を満たすことになる。そうすれば神谷代表の願い（マスコミにおける露出度の高まり）が叶うのではないかと、というわけだ。

言うまでもないが、ドラゴンボールとは、七つのボールを集めると、竜の神さまが出てきて、何でも願いごとを叶えてくれるという、かの神アイテムのことである。

もともと梅村氏の政治的スタンスは、参政党のそれと限りなく近いものがある。それゆえ踏み迷うことなく、梅村氏は参政党への入党を決めた。参政党に所属する国会議員は五人ということになった。

参政党の躍進

マスコミのほうも、参政党のテレビ露出を増やさない訳にはいかなかった。自分たちが公表していた条件を、文句のつけようがない形でクリアされてしまったからだ。

マスコミは、せめて政策をネガティブに扱うことによって、参政党シンパの増殖を食い止めようとした。だが、それを成功させるには、参政党の主張は、あまりにも簡潔明瞭にすぎた。つまり政策がシンプルすぎて、捻じ曲げようにも、捻じ曲げようがなかったのである。

それでもなお、マスコミによる捻じ曲げ工作（無理やり！）は行われたが、その場合も参政党は「むしろ叩かれれば叩かれるほど、かえってどんどん成長する」という皮肉な拡張ドラマを見せつけた。

そうした中において、梅村氏の弁舌には、まさに素晴らしいものがあった。その演説のクオリティは、神谷代表のものと同壁とすら思えるものがある。

つまり彼女は、政党要件を満たすための単なる「人数」ではなかったのだ。こと演説においては、彼女は、どこにも得難いほどの「人物」なのであった。

かくして参政党の躍進が始まった。参議院選挙が終わってみれば、参政党の国会議員数は、かつての五人から十八人へと増強されていた。

もはや参政党は「知る人ぞ知る」というレベルの政党では全くなくなった。これからの日本のために、これは何よりも喜ばしいことと言えるだろう。

ヘルマプロデイツ I

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
